

# チョーチンのセツト釣り

## 最近の傾向

竿いっぱいの中を、バラケとくわせエサで釣るのが、チョーチンのセツト釣り。だが、管理釣り場と、準山上湖やダム湖などの野釣りでは、同じ釣り方でも、冬場では少し考え方が変わってくる。

管理釣り場は、竿が比較的短め。これはへら鮎のタナを追うことより、釣りやすさを重視するからだ。食い渋った大型べらに、的確にエサを食

わせ、アタリを確実に出していく。そのためには風や流れに影響されにくい短竿のチョーチンがベスト。ウキも小さめで軽いものが中心になる。より細い仕掛けが有利なのはいうまでもない。

一方野釣りでは、長めの竿が中心になる。冬場のチョーチンは、放流された新べらが主なターゲット。その新べらが一番多くいるタナを探ることが大切だ。やはり18尺より深いタナが中心だろう。

## セツティング

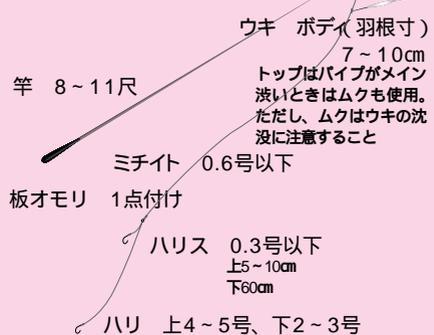
### 野釣り仕様



注意点 冬の野釣りは、とにかくウキを動かすことが大切。ポイントやタナは、盛期より狭められるから、まず事前に情報収集を欠かさないようにしたい。場所移動や竿替えの的確な判断も大切になる。

ハリスはやはり細いほどいいが、ウキは小さすぎない方がいい。新べらが主体なので、食えばアタリになる。小さいウキやムクトップは、バラケを支え切れなくなる場合があり、逆に使いづらくなることもある。

### 管理釣り場仕様



注意点 渋いほど、軽くて小さいウキや細い仕掛けが有利になる。一時ほど長いハリス(1m超)は少なくなったが、下ハリスは60cmぐらいからスタートしてみよう。

誤解されやすいのは、くわせエサのハリだ。渋いからといって、より軽いものになると、失敗することがある。へら鮎にあおられてハリスが張らず、アタリにならないのだ。逆にハリを重くすることで、いいツンアタリにつながるから、頭に入れておこう。

管理釣り場仕様

9尺チョーテンでのオモリ量とエサの大きさ

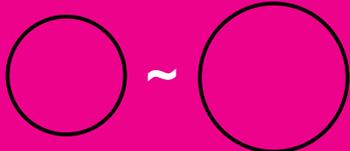
オモリ  
実寸大



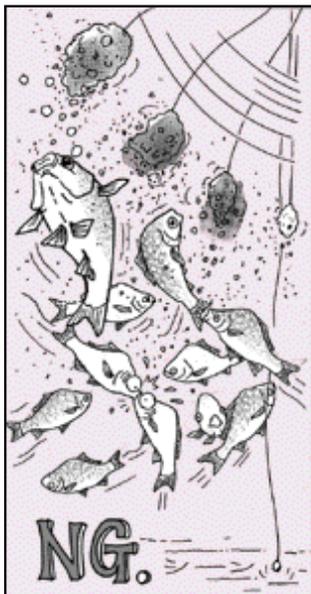
オモリの量  
高さ12mm×幅20mmくらい

エサ  
実寸大

バラケの大きさ  
直径16～20mm大に



くわせエサの大きさ  
「特選わらび彩」を  
直径5～6mmに絞り出す



へら鮒があっちこっちを向いていて、くわせエサに目を向けられない様子。「うわあ、このエサはバラケすぎだ。これじゃクワセに興味がないよ」

共に共通していえるのは、タナを安定させること。ボソボソの大バラケは必要ない。きちつとタナまで持ち、ジワジワとバラける方向で考えよ

う。この傾向は、食い渋りのレベルが上がるほど、重要性を増してくる。バラケの「抜き方」より、「持たせ方」を強く意識してほしい。

野釣り仕様

18尺チョーテンでのオモリ量とエサの大きさ

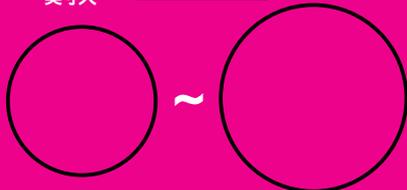
オモリ  
実寸大



オモリの量  
高さ18mm×幅25mm  
を2点付け

エサ  
実寸大

バラケの大きさ  
直径20～25mm大に



くわせエサ  
グルテンの大きさ  
直径10～12mm



パターン 1

管理釣り場のバラケエサ

ダンゴの底釣り夏100cc +  
新B 300cc +  
セット専用バラケ200cc +  
粒戦50cc + 水200cc



エサの作り方

「ダンゴの底釣り夏」, 「新B」, 「セット専用バラケ」, 「粒戦」は、すべて一緒練りで作る。あまり強く混ぜ合わせる必要はなく、「粒戦」の粒子が他の黙エサの中に均一に混ざり合ったのが確認できたら、これでできあがりとなる。あまりネバリ気のない、しっとりめのボソタッチになるだろう。

ほとんどの管理釣り場で通用するバラケで、使えるタナの幅も広い。9～11尺竿のチョーテンはもちろんだが、1mの浅タナセットにも効果が高いほど、優れたバラケといえる。「ダンゴの底釣り夏」を使っているため、エサのまとまりはよく、練り込まずに使っていくのがコツ。タナに入ったエサから、「粒戦」の粒子がポロポロと落ちていくようなイメージで使っていく。

## 釣り方&エサ使いのコツ

パターン、パターン、いずれのパラケにも共通していえるのは、早くバラケさせすぎないことだ。きちんとハリのチモト部分を押さえ、丁寧に付けよう。使うウキの大きさやトップの種類によって差はあるが、自分のウキのトップ先端1〜2目盛りぐらいまで、バラケを持たせてなじませる。

また、ただ深くなじんだだけではいけない。なじんだウキがボンと上がってしまうのではなく、ジワジワと一定のテンポで上がってくるようにハリ付けしていきたい。なじんだウキの上がり方が遅すぎるときは、少しずつ手水をしてやわらかくしてみよう。

ウドンを使ったセット釣りは、上バリのバラケが抜けて、下バリのウドンだけになったとき、いいツンが出てヒット率も高くなる。しかし、そんなアタリを期待するあまり、

つい待ちすぎの釣りになって、へら鮎の寄りを失うことも多い。

暑い冬場はバラケに強く反応するへら鮎が少ないので、バラケがハリ持ちしていてもいいアタリは積極的に合わせていく。そしてバラケがハリから抜けたら、待ちすぎないように。強いサワリが出ていれば別だが、ここで待ちすぎると、釣りのリズムが崩れていき、結局はいい釣果にならないことになる。

「粒戦」使用のパターンは、あまり練らずに使うのがコツ。少し手水でやわらかくすることはあるが、ウキのなじみ方や返し方の調整は、ハリ付けでの押さえ方や大きさで行っていく。

パターンは多少練って使えるが、それでも練りすぎはよくない。手を濡らし、丁寧にかけ混ぜるようにしたい。へら鮎のウワズリが感じられ

## パターン 2

管理釣り場のバラケエサ

ダンゴの底釣り夏100cc +  
GTS200cc +  
セット専用バラケ200cc +  
水150cc + 軽駄100cc



+



+



+



+



### エサの作り方

「ダンゴの底釣り夏」、「GTS」、「セット専用バラケ」をいったん水になじませてから、「軽駄」を最後にかからめるように混ぜ合わせて仕上げる。やや硬めのボソタッチになるだろう。こうしてできたものを基エサとし、一部を別のエサパウルに移したり、ひとつのエサパウルの中で小分けしておいて、使う分だけ修正していく。一番効果をみせるのが、しっとり

したチョイボソのタッチ。手を濡らし、使う分のエサを混ぜ合わせていくと、こんなタッチが出てくるだろう。

パターン のバラケより、へら鮎の活性が高めなときに有効なバラケだ。また、このエサに水を吸わせておいた「粒戦」を追い足すことができる。こうすれば食い渋りにも十分対応していける。

管理釣り場の

くわせエサ

特選わらび彩



ポイント

管理釣り場のくわせエサは、「特選わらび彩」を絞り出したウドンがメイン。標準水量の120ccを基準にし、多少の水加減で好みのやわらかさに仕上げよう。太さは約5～6mmでよい。

当日の朝に作り、「わらび職人」に浸しておこう。使うときは、密閉容器から1本ずつ小出しにしたい。たくさん出してしまうと、使い切る前にウドンが変化することがある。残りはきちんと容器に仕舞っておこう。

たときは、こうしてエサをしつとりさせつつ、ハリに持たせていくことで、抑えやすくなる。

パターン・どちらのエサも、もっとしつかりタナを抑えたいときや、もっとへら鮎を寄せたいときには、「粒戦」の追い足しという手直しだが、大きな効果を発揮する。作ったバラケエサとは別に、「粒戦」100ccをエサポウルに入れ、水

50ccを加えて行き渡らせよく吸わせたものを用意しておく。

そして、ウキがフワフワするだけでツンが出ないとき（ウワズリ）や、サワリそのものがしつかり出ないとき（寄り不足）に、水を吸った「粒戦」を軽くひとつかみずつバラケエサに加えていく。追加した「粒戦」が均一になるように混ぜ合わせれば、修正は完了だ。

管理釣り場での  
チョーチンセット釣り **こんな時どおする？**

1  
サワリ・アタリが  
少ない  
もっとウキを  
動かすには？

仕掛けでいうと、ひとつはもう少しウキを軽めの小さいものにする。そして重要なのが下ハリスの長さだ。最近では超長ハリス（1m以上）は少なくなったが、本当に泳いときは、それに近い長さに伸ばすことで、サワリが始めることがよくある。ハリスは一度に5cm単位ぐらい伸ばしていく。もしパターン のエサだったら、「粒戦」使用のパターン にすると効果は大。もしパターン を使っているなら、「粒戦」（水に浸したものを）を追い足してみよう。もちろんパターン に「粒戦」を追い足すのも有効な手段だ。

2  
モヤモヤ・フワフワ  
は出ている  
でもいいツンが  
出ないのは？

ひとつはハリスが長すぎる場合。もうひとつはハリが軽すぎる場合。いずれも下ハリが張り切らないために、ツンにならないことが多い。5cm単位でハリスを詰めていったり、軸がためて重みのあるハリにすることで、大きく改善されていく。エサが開きすぎていないかも確認しよう。バラケすぎによって、へら鮎のタナが落ち着かなくなっていることが多い。ちょっとだけエサを小さくしてしつかりハリ付けし、ウキを深くなじませることを心掛けよう。こういうときは、「粒戦」の追い足しも効果を出してくれる。

3  
カラツンばかり  
もっとヒット率を  
上げるには？

ハリスが長すぎるため、糸ズレが出やすくなり、これがカラツンになっていることがある。ハリスを5cmずつ詰めてみよう。ただし、ハリスを詰めてウキが動かなくなったら要注意。すぐに元に戻すこと。そして多少のカラツンはあっても、すべて消そうと欲張らないことだ。むしろカラツン混じりでも、リズムよく打ち返すことが、いい釣果に結びつくと考えたい。もし「彩」のウドンを使っていたら、「感嘆」や「感嘆」や「カ玉」などに変えるのもひとつの手。くわせエサが変わることで、不思議にカラツンが消えることがある。



## 釣り方&amp;エサ使いのコツ

野釣りのチョーチンのセット釣りは、バラケをしつかりハリ付けし、タナまで持たせること。トップ先端を1〜2目盛り残しまでウキを深くなじませるようにしたい。いったんウキがなじんだら、ジワジワとゆくり返させることも大切。早くバラケさせすぎると、アタリが出にくくなる。

きちんとウキをなじませ、バラケをこらえさせると、食いアタリがはつきり出てくるはずだ。

バラケの重みでウキが潜ってしまったときや、へら鮒の寄りが悪いときは、少しずつ手水でバラケをやわらかくしていこう。やわらかいエサを大きくハリ付けすると、寄せ効果が高まる。ハリ持ちが足らず、ウキのなじみ幅が出にくいときや、なじんでもすぐにウキが返してしまつときも、練習していくとよい。

「新B」入りのパターン は、寄せ重視のバラケエサ。「へらスイミー」入りのパターン は、ボソで使うと寄せパワーがあるが、やわらかく練習していくと、重みとネバリが加わっ

ていく。へら鮒を寄せるといふより、へら鮒の寄りを保ちつつ、そのへら鮒を落ち着かせる効果が高まっていく。数を釣り込んでいくときに絶好のバラケになってくれる。

グルテンをくわせエサに使うセット釣りは、グルテンがハリ持ちしないために釣れなくなっているという失敗が、意外に多く見受けられる。上下のハリにエサを付けて打ち込んだら、ただウキがなじむかどうかを見るのではなく、バラケエサでのなじみ幅と、グルテンでのなじみ幅を見ることを忘れないでほしい。

野釣りのチョーチンセットは、グルテンを極端に小さく付ける必要はない。ある程度の大きさを、ハリにしっかりと付けるようにしたい。こうすれば、へら鮒のアタリは力強く出るはずだ。

また、へら鮒が完全に寄り切れれば、両グルテンで釣り込むこともできるが、これは数少ないラッキーな場合だけ。たとえアタリが続いていても上ハリバラケ、下ハリグルテンで釣り続けるのが基本だと考えよう。

## パターン 3

野釣り場のバラケエサ

## 新B400cc + 段差バラケ400cc + 水200cc + 鬼バラ200cc



+



+



+



## エサの作り方

「新B」、「段差バラケ」に水を注ぎ、全体に行き渡らせたら、エサボールにこすりつけるように練習していく。手にベトツとしたネバリが感じられるまで練習すること。

次に「鬼バラ」を加え、よく混ぜ合わせればできあがりだ。硬めのネバソタッチになるだろう。

このエサの特長は、マルキユー製品の中でとりわけ寄せバ

ワーのある「新B」を使っていること。だから広大な野釣り場でも、力強くへら鮒を寄せてくれる。また、ネバリを出して作っているため、ハリ付けがしやすくタナまで持たせやすいことだ。

やわらかく練習で使えるので、応用範囲も広く、大きななどのハリ付けの変化もさせやすいはずだ。

## 野釣り場での チョーテンセット釣り こんな時どおする？

### Q1 カラツンが出る もっとヒット率を高めるには？

カラツンを嫌って、管理釣り場のように早くバラケを抜こうとしないこと。あくまでもバラケを持たせ、ウキを入れる釣りを通そう。野釣りは多少のカラツンを気にせず、我慢して打ち続けることが大切だ。カラツンは長すぎる下バリに問題があることも。70cmでスタートしていたら、10cm単位で詰めてみよう。管理釣り場のようにシビアに考えることはない。10cm詰めてみれば、はっきり答えは出る。ハリスを10cm詰めてアタリがなくなれば、また元に戻すこと。ここから少し単位を小さくして詰めてみるとよい。

### Q2 サワリはあるが落とさない どうすれば？

硬めのエサを、小さくしっかりハリ付けして、ウキが深くなじんだら、すぐには上がってこないくらいにしてみよう。このようにバラケを抑えることで、カチッと落とすアタリが出ることが多いはずだ。バラケを抑えたエサでも、落とすアタリが多くなれば、必然的に打ち返しのリズムができてくる。だからへら鮎の寄りをなくすことはないはずだ。そしてリズムができあがるにつれ、やがてやわらかくバラケでもカチッと落とすようになっていくだろう。

### Q3 ウキが動かない サワリすらないときは？

野釣りの場合、狙うタナが違うか、ポイントを外しているかの2つが大きな原因。よく周りを見て、自分だけでなく周囲みんなが釣れないときは、移動しよう。自分は釣れなくても、近くで釣れ始めてきたら、やがてアタリがでる可能性は高い。もう少し打ってみる。タナが原因だとしたら、冬はもっと深い方へ考えるのが一般的だ。18尺でダメなら21尺に伸ばしてみる。タナの情報を得ているも、安全なのは深めからスタートすること。これでアタリが活性化し、へら鮎のタナが上がるようであれば、竿を短くしていくとよい。

## パターン 4

野釣り場のバラケエサ  
へらスイミー200cc +  
水200cc +  
バラケマツハ400cc +  
スーパーダンゴ400cc



### エサの作り方

「へらスイミー」に水を注いで全体をドロドロにしてから、「バラケマツハ」と「スーパーダンゴ」を加えて混ぜ合わせる。ポソツ気よく出たタッチに仕上がるだろう。「へらスイミー」というエサは重くて粘ると思われがちだが、ポソのエサになっているときは、決して重くなく、またバラケ性にも富んでいる。従って、寄せ効果も十分に高いわけだ。そしてやわらかく練っていくと、「へらスイミー」はいよいよその重さを発揮してくる。へら鮎がたくさん寄せたときは、特に新べらはウズリたがるが、やわらかく練ることでタナを抑えるため、アタリも安定する。寄せよりも、数を釣り込むためのバラケといえよう。

## 野釣りの

## くわせエサ

パターンA(食いのおいしとき)  
グルテン四季50cc +  
わたグル50cc + 水110~120cc



エサの作り方 「グルテン四季」と「わたグル」に水を注いだら、一気に勢いよく指で混ぜ合わせよう。こうすることで、グルテン成分の偏りが防げる。エサが固まったら、そのままつまみ取ってハリ付けする。へら鮎に活性があるときは、ふくらみのあるグルテンに興味を示す。「グルテン四季」がそのふくらみ役をするため、早いアタリが出やすくなり、ペースが上げられる。

パターンB(強いとき)  
わたグル50cc + 水75cc



エサの作り方 「わたグル」に水を注ぎ、勢いよく混ぜてから固まらせる。「わたグル」は、練らなければバラケ性がある。従って、より渋くアタリが出にくいときは、手揉みを加えたり、やわらかく練ってバラケ性を抑えていこう。しっかりハリ持ちし、じっくり待てるエサになる。